

新約聖書とその思想 —政治思想の観点より—

S. Ashina

オリエンテーション

<本演習の意図と目的>

新約聖書は、キリスト教思想の基盤であり、キリスト教思想研究を志す者には、一定程度以上の聖書原典を読む能力（語学・聖書学・聖書神学など）が求められる。本演習ではギリシャ語原典の講読を通して現代聖書学の基礎の習得を目指す。

本年度は、多岐にわたる新約聖書の思想の内から、政治思想に関わるテキストを講読する。特に、パウロ書簡（ローマの信徒への手紙）を中心に、聖書テキストに即して思想へと迫ることを試みたい。本演習では、各種の辞書の使用方法から、聖書注解書の扱い方といった、聖書テキストを読解する上で必要となる基礎的作業の習熟を目指す。

また、パウロの政治思想の理解を深めるために、Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993.などの講読を並行して行う予定である。受講者には、ギリシャ語原典の読解のほかに、このドイツ語テキストの読解が求められる。

受講者には、ギリシャ語初級文法を習得していること（必要があれば、個別的に相談）が求められる。

<テキスト・文献>

1. Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 27.Aufl, 1993.
2. Gerhard Kittel und Gerhard Frierich, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Kohlhammer, 1933-1973.
3. C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (ICC), T & T Clark, 1975.
4. Cristina Grenholm, *Romans Interpreted. A Comparative Analysis of the Commentaries of Barth, Nygren, Cranfield and Wilckens on Paul 's Epistle to the Romans*, Almqvist & Wirsell International, 1990.
5. Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993.
ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』（高橋哲哉・清水一浩訳）岩波書店、2010年。
6. Giorgio Agamben, *Il Tempo Che Resta. Un Commento alla Lettera ai Romani*, Bollati Boringhieri, 2000.
ジョルジョ・アガンベン『残りの時——パウロ講義』（上村忠男訳）、岩波書店、2005年。
7. 宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店、2010年。
8. スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』（中山徹訳）青土社、2001年。

9. アラン・バダイウ『聖パウロ——普遍主義の基礎』（長原豊・松本潤一郎訳）青土社、2004年。
10. Riachrd A. Horsley, *Paul and Empire. Religion and Power in Roman Imperial Society*, Trinity Press International, 1997.
11. Dieter Georgi, *The Opponents of Paul in Second Corinthians. A Study of Religious Propaganda in Late Antiquity*, T & T Clark, 1987.

<演習予定>

9/30, 10/7, 14, 21, 28, 11/4, 11, 18, 25, 12/2, 9, 16, 1/13, 20

1. オリエンテーション・打ち合わせ：9/30
2. 基本箇所を読解（Rom., 1Co.）
3. 研究文献（5、6、7） → 分担し発表する。

<政治神学の射程>

1. 栗林輝夫「帝国論の中のイエスとパウロ——組織神学からのコメント」（日本基督教学会シンポジウム「イエスからパウロ？」、立教大学、2010/9/18）
 - ・帝国論の新たな展開、アメリカ、神学、聖書学、宗教学、政治学などの諸分野
 - ・アメリカの聖書学会（SBL）の「聖書と帝国」分科会（The Bible and Empire Unit）パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ
2. 現代思想におけるパウロ
 - 古代の歴史的・思想的文脈におけるパウロ
 - ユダヤ思想の文脈におけるパウロ
 - 聖書学的議論（従来の閉鎖的な議論に対して）への新たな問題提起
3. 「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

<新約聖書の国家理解>

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。
 - 古代キリスト教：迫害から国教化へ、敵対から協調へ。
2. イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離？
 - ・マルコ 12
 - 13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているのでしょうか、適っていないで

しょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

3. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係

・ヨハネ黙示録13～14

15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもしないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

佐竹明『ヨハネの黙示録 上中下』（現代新約注解全書）、新教出版社、

2007-2009年。

田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004年。

第四章「終れない終末論」（243-320頁）

4. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

・ローマ13

1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めを背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6 あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

5. 迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）

66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第1次ユダヤ戦争(66-70)

95 頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第2次ユダヤ戦争(132-135)
249：デキウス帝の迫害
303：ディオクレティアヌス帝、キリスト教を迫害。

6. キリスト教の公認と国教化

313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）
325：ニケア公会議 361：背教者ユリアヌス帝即位。
381：コンスタンティノポリス公会議
392：国教(テオドシウス帝)